# 17［評論］　『日本のデザイン』

［１］　美を生み出すのみならずそれを運用していく職能としてデザイナーは、日本ではいつ頃から動きはじめたのであろうか。僕は、今日のデザイナーと似ている職能、あるいは才能として、室町時代前後の（同朋衆）を思い浮かべないわけにはいかない。

［２］　阿弥とは、やや乱暴にたとえるなら、優れた技能や目利きの名称に付す「①拡張子」のようなものだ。最近は、そのデータがどのソフトウエアでできたかを表記する目的でデータの名称の最後に「.doc」などと付す。意味や機能は異なるが、ニュアンスとしてはこれに似ている気がする。だから室町以降の人の名前に「阿弥」と付されていたなら、「.ami」、なるほどその筋のソフトウエアを共有するアーティストか、と考えればだいたい遠からずの素性を理解できる。

［３］　「阿弥」は元々、浄土宗の一派である時宗の僧侶の法名に用いられていたものである。時宗の僧侶は合戦に同行する僧侶でもあった。武士が戦場で命を落とすようなことがあれば、すかさず念仏を唱え、浄土に旅立つための一連の始末を請け負っていたらしい。［　Ａ　］、ただ戦に同道するだけで貴重な兵糧の世話になり続けるというのも不自然であり、［　Ｂ　］宗教方面のみならず、負傷者の手当や日常の世話、そして芸術諸方面の活動をも担うようになった。［　Ｃ　］僧門の人々は元来、芸能をよくしたことも「阿弥」という記号に独特の意味を含ませるきっかけとなったと想像される。

［４］　［　Ｄ　］技芸の才のある個人や一族がこの名称を用いたことで転用がおこり、時宗の徒ではない者までもが阿弥を名のるようになった。有力な武家に重用されて、芸術諸般や日常雑務を担っていた人々は「同朋衆」とも呼ばれるが、「同朋」という言葉がａカンキするイメージよりも、今日、歴史上で美に関与した者としてすでに耳にしている技能者の名称をたどることでイメージの広がる「阿弥衆」をここでは用いてみたい。

［５］　文化というものは常に、時を制する力とつながり、また拮抗して呼吸している。それは武力であったり、経済力であったり、政治力であったり、ポピュリズムであったりするが、そういう力が、力であるゆえの穢れや毒を拭うように、感覚的な洗練としての美を欲するのである。このような希求を文化の端緒というべきかどうかはともかく、まずたゆまずその要望に応え、美を供給していく役割を担う人々がいる。美に触れ続けるということは、時代の趨勢を作るパワーとは異なるｂイソウに、人間の感覚のときめきを生み出すもうひとつの中心があることを意識し続けるということである。美と感覚を交感させて日々を過ごすことと、時の力に請われてこれを供していくことの間には、必ずｃビミョウな葛藤が生じてくる。時の力は自分たちの技や才能の発露をうながす土壌すなわちクライアントであるが、美をｄサハイする現場に精通する人々にｅ培われてくる感覚は、常にクライアントの思惑を超えて過度に成熟する。この過度なる感覚の成熟や横溢をこそ文化と呼ぶべきかもしれない。阿弥衆の仕事に、自分が感じるそこはかとない共感は、この過度なる感覚のやり場に起因する微かなる葛藤と放蕩をそこに感じるからである。足利幕府であれ、資本主義のもとで君臨する企業であれ、［　Ⅰ　］を洗練されたイメージへと変容させて用いたいという希求に、半ば応え、半ばあらがうという状況を共有しうる立場として、僕はこれらの技能集団に直感的なシンパシーを感じるのである。

［６］　日本美術は、歌にしても書画にしても天皇や貴族のたしなみから発生しており、歌を詠むことも、それを料紙に書きつけることも、高貴な地位の人々が主役で、彼らが直接手を下してそれを行っていた。高い地位の家に生まれつき、得難い情報や知識を幼い頃から身につけて育った文化的エリートのみが実践できるパフォーマンスとして、美の世界は存在した。しかしながら、時代が下るにつれ、美を求める意志と、それを実践・具体化させる技能とが分離してくる。美を具体化できる能力は、地位や生まれではなく個人の生来の能力や特別な修練によるという認識が、徐々に一般化してくるのである。平安時代から鎌倉時代にかけて、高度な修練を積んだ宮大工や彫り師・絵師といった職人あるいはアーティストが美術シーンを牽引したのは、②そういう流れにおいてである。しかし、室町時代の阿弥衆は、そうしたアーティストや職人の気質とはまた③ひと味異なる才能たちであった。つまり絵画や彫刻を生産するのみならず、その運用の仕方や配し方、すなわち「しつらい」を介して美を顕現させる才能が活躍しはじめるのである。

［７］　室町時代に確立した諸芸として、能、連歌、立花、茶の湯、築庭、書院や茶室の建築などがあげられるが、いずれも美的なオブジェクトを生み出すだけではなく、組み合わせ、制御し、活用する才能が諸芸を生き生きと走らせていく。つまり「もの」を作るのみならず「こと」を仕組み、美を顕現させる職能たちが活躍しはじめる。遁世者という言葉があるが、美を差し出してその報酬で生きるということは、どの世においても社会の常道、まっとうな生業から逸脱した存在である。これは現代も同じことだ。④才能で生きるということは「固有名詞」として社会に立つということであり、その立ち方は才能単位でまちまちで、簡単に人に譲り渡したり、受け継いだりできるものではない。阿弥衆とはすなわち、固有名詞で室町文化のクライアント筋から、指名され頼りにされた才能なのである。純粋芸術とは異なる文化諸般のアクティビティを担うという性格上、僕は日本におけるデザイナーの始原をここに感じるのだ。

［８］　美という価値の運用が社会の中で、どう位置づけられたか、そしてそれをもとめる者、つくり出す者、見立てる者、調達する者の社会的な地位や立場、相互の関係がどうであったか。また美の運用で獲得される感覚資源は、いかなるかたちで伝承・保存され得たかなどは、今日の状況に対照させてみるととても興味深い。日本のデザイン史は、まさにこのあたりから書きはじめられなくてはならないかもしれない。

●出題校

青山学院大学

■覚えておきたい語句

□17カンキ……………………呼び起こすこと。

□17関与……………………ある物事にかかわること。

□19拮抗……………………勢力・力がほぼ等しく、互いに張り合うこと。

□20ポピュリズム…………人民主義。

□21希求……………………心から願い求めること。

□21端緒……………………物事の始め。

□22倦まずたゆまず………飽きたり怠けたりしないで。

□23趨勢……………………物事の進み向かう様子。物事の移り行く勢い。

□23イソウ……………………全体の中における位置づけ。他との位置関係。

□25葛藤……………………心の中にある対立する欲求や感情の選択に迷う状態。

□25発露……………………心の中の思いが自然と表にあらわれ出ること。

□26サハイ……………………指図すること。とりさばくこと。

□27横溢……………………あふれるほど盛んなこと。

□28起因……………………物事の起こる原因となること。

□29放蕩……………………思うままにふるまうこと。

□31シンパシー……………共感。

□38牽引……………………引っ張っていくこと。

□41顕現……………………はっきりと現れること。

□46逸脱……………………本筋からはずれること。

□50始原……………………物事のはじめ。原始。

◆漢字

　本文中の二重傍線部ａ〜ｅのカタカナは漢字に直し、漢字は読みをひらがなで記せ。

ａ［　　　　］ｂ［　　　　］

ｃ［　　　　］ｄ［　　　　］

ｅ［　　　　］

問１　傍線部①は、ここではどのような意味として用いられているか。最も適当なものを次から選べ。　5点

ア　僧侶集団　　イ　名誉称号　　ウ　接続機能

エ　連想装置　　オ　識別記号

〔　　　〕

問２　空欄Ａ～Ｄに入る最も適当な語句をそれぞれ次から選べ。ただし同じものを二度使ってはいけない。3点×4

ア　けだし　　　イ　つまり　　ウ　しかし

エ　とりわけ　　オ　おのずと

Ａ［　　　］Ｂ［　　　］Ｃ［　　　］Ｄ［　　　］

間３　空欄Ⅰに入る最も適当な漢字一字を本文中から抜き出せ。5点

〔　　　〕

問４　傍線部②とは、どんな流れか。本文中の言葉を用いて五五字以内で答えよ。　12点

〔　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　〕

問５　傍線部③とはどんな才能なのか。最も適当なものを次から選べ。　8点

ア　職人気質で個性の強い阿弥衆たちをしっかりと束ねて、集団を統率する才能。

イ　美的なものをつくり出すのみならず、それを効果的に演出、デザインする才能。

ウ　しつらいを重視した室町という時代に相応しい純粋芸術を生み出すような才能。

エ　権力者に従属することなく、専ら自分の思うままに美を顕現できるような才能。

オ　クライアントの要望を咀嚼し、それを取り込みながら美を顕現できるような才能。

〔　　　〕

問６　傍線部④は、どのようなことか。その説明として最も適当なものを次から選べ。【読みのセオリー】8点

ア　ここでの才能とは固有の能力を意味し、それに支払われる報酬で生きることは、そのままその人の社会的な存在証明となっているということ。

イ　それまで芸術家集団だった阿弥衆が室町時代に入ると各構成員が個性を強めたため、権力者たちは個人を指名するようになったということ。

ウ　美を差し出してその報酬で生きるということは、才能で生きるということに他ならない。その才能はそれぞれ個性的でまちまちだということ。

エ　室町文化のクライアントは阿弥衆が有するそれぞれの個性に値を付け、阿弥衆はその対価として美を顕現させる義務を負っているということ。

オ　純粋芸術とは異なる文化諸般のアクテイビティを担っていた阿弥衆は、クライアントから指名され頼りにされ、その報酬で生きていたということ。

〔　　　〕

【解答】

漢字　ａ喚起　ｂ位相　ｃ微妙　ｄ差配　ｅつちか（われ）

問１　オ

問２　Ａ＝ウ　Ｂ＝オ　Ｃ＝エ　Ｄ＝イ

問３　力

問４　美を具体化できる能力は、地位や生まれではなく個人の能力や特別な修練によるという考えが一般化してくる流れ。（52字）

問５　イ

問６　ウ

【現代文読解用語200】

問　次の言葉の対義語をそれぞれ答えよ。

115特殊　⇔　116［　　］

117　⇔　118［　　］

119仮説　⇔　119［　　］

121主観　⇔　122［　　］

123主体　⇔　124［　　］

125広義　⇔　126［　　］

127内包　⇔　128［　　］

129横柄　⇔　130［　　］

131勤勉　⇔　132［　　］

【解答】

116普遍（一般）　118帰納　120定説　122客観　124客体　126狭義　128外延　130謙虚　132怠惰

【読みのセオリー】

★文章の方向性を読み取る

　評論は、筆者の考えや見方を読者に伝えることをねらいとしている。自分の考えを読む人にわかってほしいと考えるから、評論は書かれるのである。

　文章のはじめに、その文章で何について述べようとするかを示すことは、相手にわかりやすく伝えようとする大事な方法の一つである。

　題名（入試問題では文章の終わりに出典として題名が記されていることもある）や、最初の１・２段落を読みながら、どのようなことを述べようとしているか、文章の方向性をつかむことに意識を向けるとよい。

〔要　約〕

［１］〜［４］段落…阿弥衆の説明

［５］段落…阿弥衆への筆者の共感

［６］段落…阿弥衆の独自性

［７］段落…現代のデザイナーの始原としての阿弥衆の説明

［８］段落…筆者の感想

　　　　　↓

　「もの」を作るのみならず「こと」を仕組み、美を顕現させる職能としての室町文化の中心的才能であり、純粋芸術とは異なる文化諸般のアクティビティを担うという阿弥衆の性格に、日本のデザイナーの始原を感じる。（99字）

〈筆者＆出典〉原　研哉（はら・けんや）一九五八（昭和33）年岡山県生まれ。デザイナー。日本デザインセンター代表。武蔵野美術大学教授。長野五輪の開・閉会式プログラム、愛知万博公式ポスターをデザイン。毎日デザイン賞、世界インダストリアルデザイン・ビエンナーレ大賞などを受賞。著書に『デザインのデザイン』などがある。本文は『日本のデザイン―美意識がつくる未来』（岩波新書、二〇一一年）より。

☆「セオラム　補充問題」問題は次の３種類があります。

　＊差し替え　　　……　当該の問と差し替えるもの

　＊追加　　　　　……　同じ問いで追加された問題

　＊新問　　　　　……　追加が可能な新たな問題

新問

20行目「ポピュリズム」の意味として最も適当なものを次から選べ。

　ア　国家主義　　イ　大衆主義　　ウ　社会主義

　エ　民族主義　　オ　多文化主義

答　イ

新問

32〜33行目「日本美術は、歌にしても書画にしても天皇や貴族のたしなみから発生しており、歌を詠むことも、それを料紙に書きつけることも、高貴な地位の人々が主役で、彼らが直接手を下してそれを行っていた」とあるが、それを裏付ける作品や人物を次から二つ選べ。

　ア　好色一代男　　イ　古今和歌集　　ウ　葛飾北斎

　エ　後醍醐天皇　　オ　嵯峨天皇

答　イ・オ

新問

本文の内容と合致しないものを次から一つ選べ。

ア　日本美術は、天皇や貴族のたしなみから発生し、和歌を詠むことや書くことも、文化的エリートだけが実践できるパフォーマンスであった。

イ　文化は、武力・経済力・政治力・ポピュリズムといった時を制する力とつながり、また拮抗して呼吸しており、それゆえ感覚的な洗練としての美を欲する。

ウ　「阿弥」は元々、浄土宗の一派である時宗の僧侶の法名に用いられていたもので、技芸の才のある個人や一族がこの名称を用いたことで転用がおこった。

エ　美を生み出すのみならずそれを運用していく職能としてデザイナー、室町時代あたりからはじまると考えられる。

オ　能、連歌、茶の湯、築庭などは室町時代に確立し、いずれも美的なオブジェクトを生み出す才能がそれぞれの芸を生き生きとさせていった。

答　オ